

## 第2回生物多様性広報・参画委員会 議論の要旨

### (1) コミュニケーションワードについて

○コミュニケーションワードを選定する前提として、その位置づけについて意見が出されたが、コミュニケーションワードはあくまでも一般国民に幅広く生物多様性は何かを伝えるための国内での国民広報向けのものであり、世界に向けて発信する言葉や、里山イニシアティブのようなCOP10で日本が主張する言葉とは別に考える3本立てであることを確認した。ただし、それらは一つのイメージでつながっているということを前提に、コミュニケーションワードは包括的でなおかつ理解が行き届くような言葉を選定するという事で合意した。

主な意見は次のとおり。

- ・他省庁等や地域の参画を阻むような言葉を選ばない。関係省庁連絡会議などに本コミュニケーションワードを展開し共有してほしい。
- ・「京都」のように「愛知」が言われ続けるためには国際的に通用するものいいが、日本の中だけで通用させるものか。対象によって選ぶ言葉も変わる。
- ・全世界的な「For Life on Earth」と日本の「里山イニシアティブ」、さらにもう一つ言葉があるとすると、わかりにくくなる恐れもある。
- ・COP9の「One World, One Nature, Our Future」のような標語をCOP10でもつくる場合、今回の言葉との関係はどう考えるのか。

○「いのち」や「つなぐ」という言葉が含まれていることが評価され、⑥の「地球のいのち、つないでいこう」という案を中心に、英語訳も検討し、各委員に再度投げかけた上で進めていくことで同意を得た。ワード案に対しての主な意見は次のとおり。

- ・絶滅の恐れのある野生生物がいるというイメージにとどまらず、地球の裏側で起きていることも含めて私たちの生活にすべてつながっているというメッセージが伝わる言葉であるといい。地域の生物多様性の恵みを活用することが自然保護につながるというメッセージを伝えていくことも重要。
- ・条約の「For Life on Earth」という言葉から考えると、「いのち」という言葉を使い、かつ前向きな参画の輪が広がるイメージのある⑥か⑦がいい。英語では「For = ために」という言葉によって「つないでいこう」というアクションが感じられるので、違和感はない。
- ・「未来」という言葉のある①や⑤、特に「○○しよう」という行動につながる意思が感じられる⑤がいい。
- ・言いやすく聞きやすく、行動を喚起するという点で⑥がいい。
- ・生物多様性という言葉と、それをフォローするキャッチフレーズとして⑥などが

セットで広がっていくことを期待したい。

- メディアに取り上げてもらうという点では短いことも重要。
- 言葉の意味自身に疑問を抱かれるようなものはよくないので、わかりやすい⑥か⑦がいい。「つなぐ」は抽象的な感じもあり、⑦の「もう一度」というのは危機感をあおらずに壊れてしまっていることを暗に示し、何をするのかは自分で考えようということを思い起こさせるのでいい。
- 生物多様性についてよく知らない多くの人に本当にアピールできるのかは少し心配もあるが、⑥がいい。
- 生物多様性の本質を、一般周知のための口当たりの良さや分かりやすさのために矮小化してはならない。むしろ、生物多様性の内容をこのワードに基づいてこれから説明していくという構えで選ぶべき。そういう意味では「つないでいこう」という考え方は落とすべきではない。
- 日本ならではのコミットメントやオリジナリティが反映されるべき。⑥がいいと思うが、日本はいのちの力を活かす技術力をベースに生物多様性にコミットしていくという意味で、「地球のいのち」を「いのちの力」くらいの強い言葉にできるといい。
- 「つなぐ」という意味が重要。地球は「いのち」そのものであることを国民に理解してもらうために、最初はわかりやすく、やがて気づいてもらえるようにする。少し解説を加えれば広がりも出ると思うが、解説はつけられるか。
- ⑥であれば英語に直したり、他のさまざまな取組に対してネガティブに働かない。
- キャッチフレーズとしてはテンポが必要。⑥を「いのちのつながり、地球の未来」というように体言止めにしたほうが強く感じるがどうか。
- 曼荼羅のようなイメージがあり、日本からのメッセージとして、つなぐということについてもきちんとわかるようにしたい。
- 英訳は、そのまま直訳するのではなく、英文として分かりやすいものを選ぶ。ただし、日本語と英語がなじみにくいのはよくないのでその点について留意する。

## (2) 行動リストについて

○行動リストのあり様については、トップダウン型でなくボトムアップの仕組みをしつらえることが重要との意見が多く出された。国民にモチベーションをもってもらうために行動リストという形で方向を示すことは悪くないが、あくまでも例示として提示し、ここからどういううねりを作っていくのか、うねりの結果を行動に結びつけていくための仕組みや仕掛け、そのための行動リストの整理の仕方を再検討するということで合意した。主な意見は次のとおり。

- リオの環境サミットがあらゆる NGO の議論を通じて「アジェンダ 21」を作成し

たように、国が整理してしまうのではなく、全国ブロックの中から湧き上がるようにつくっていくべき。

- ・ COP によって日本人が、世界が変わるためには、国民も問題意識を持って参加して行動するというねりを作りあげることが重要であり、ありとあらゆる形でボトムアップの仕掛けを作っていくべき。最初から意見を伺い、みんなで行動を決めていこうというプロセスを見せていくことが重要である。
- ・ 結局は同じ行動になるとしても、国から言われるということに誤解を生じさせる恐れもあり、トップダウンなのかボトムアップなのかという方向性が重要である。
- ・ 国も地方も最初から同時並行で進めるべき。トップダウンでできる普及活動はボトムから上がってくるものをいざなうものになる。
- ・ 地方や NGO の声をたくさん聞いて行動計画をつくるべき。

○自分で考えることが行動につながることから、マイ行動リストの仕組みや行動リストの提示の仕方が重要との意見が複数の委員から出された。主な意見は次のとおり。

- ・ 話を聞いて理解したり、自然に触れて感動したりしても、自分で考えないと行動につながらない。自分の行動リストを作るところにボトムアップ効果が出てくるので、行動リストの提示の仕方が重要となる。
- ・ Web でのマイ行動リストの登録制度とともに、国民がもっと増やしたりできるような仕組みにしてもらいたい。
- ・ 行動リストを示し、国民から意見をいろいろ聞き、Web 上でも自分の行動リストをカスタマイズしてもらおうという設計はいい。例示がないと、自分で理解して自分に落とし込むことは難しいので重要だが、その例示は小さくまとまらず、想像力を刺激するような言葉であるべき。

○行動することでどうなるのか、目標や目指すところを解説してあげることが必要であるという意見が複数委員より出された。主な意見は次のとおり。

- ・ 行動の狙いや目標があるといい。生物多様性を学ぶと地球市民であることを実感するというのがベースにあり、その上で、「私は図鑑を見る」、「私はエコツアーに行く」というようにつながるので、ゴールや目指すところを付加すべき。
- ・ 生物多様性国家戦略等をブレイクダウンしたものが今回の目的や目標になるだろう。一つひとつの行動がなぜその目標につながるのかを解説することが必要。

○人間としての発達段階を意識して 5 段階に分けるという考え方については、概ね理解を得たものの、さらに整理を工夫すべきという意見が複数あった。主な意見は次のとおり。

- ・ 「1. 自然の中で遊ぼう」から「2. 学ぼう」にはいきなりジャンプしにくい。

- ・環境教育のスパイラルステージの流れとあっているのが非常にいい。ただし、1と2の間に、遊んだ体験の中で驚きや感動を促すような項目を入れてほしい。
- ・発達段階に沿ったものであることはいい。ただし、これにすべてを当てはめるのは無理があるし、漏れも出てくる。これを縦軸に、横軸には目的をリストアップし、マトリクスの中で考えるように整理するといいい。

○行動リストの個々の項目については、日本の里山イニシアティブという主張に行動リストが収斂していくべきであり、そこではそれぞれの地域によって異なる人と自然の関わり方や共生する文化があることを念頭において、地域ごとのユニットをつなぎ合わせていくべきとの意見が出された。主な意見は次のとおり。

- ・里山など日本の主張を確かにすることが必要である。
- ・「公園で遊ぼう」や「ピクニックに出かけよう」は、発想がいかにも東京的である。「学ぼう」には博物館が抜けているが、行くことによって学びに展開するので、「行こう」が適切。
- ・細目までは規定せず、大項目に準じて地方ごとの細目リストを作ってもら方がいい。したがって地元の中で生物多様性に取り組む企業を調べる活動などを促すようなメッセージに変えたほうがいい。
- ・「生物多様性とは何かを学ぼう」ということを最初に啓発しない限り、中途半端な行動になる。「生物多様性を脅かすものを知ろう」、「見えない自然に目を向けてみよう」、「生物の力を活かしたものづくりを知ってみよう」、「そういうことに取り組んでいる企業を調べよう」など大項目そのものを生物多様性の根本に立ち返って整理してほしい。
- ・日本では、生物の多様性を思想や哲学からアプローチした方がわかりやすいということもある。国民の目線をもう一度見直し、「いのち」や「生きる」こと、「お互いさま」などを切り口としてもいい。
- ・日本語の「もったいない」という言葉が国際語として使われるようになってきているのに、そういう言葉が出てきていない。
- ・「いのち」と「つなぐ」という言葉は重要。人間を含めた「いのち」であること、つながっていくということの意味も非常に深いということも国民が共通に理解し共有すれば大変大きな運動につながる。日本人と自然の歴史的な経緯と学問的な生物多様性をどう融合できるのかについて議論することが必要。
- ・2010年目標として文化や言語の多様性を守ろうということも入っている。文化面があるからこそ、地域性を活かして地域で行動していく、ボトムアップしていくことの意味が出てくるので、文化の部分を項目として入れた方がいい。
- ・あまり間口を広げすぎると本質から外れてしまう恐れがあるので、生物多様性の本質をどうやったら全国民に伝えていけるかを考えるプロセスが必要。広

報の技術論に走るべきではない。

- ・双六のようなおもしろい工夫もほしい。

(3) 著名人を活用した広報について

- 現在の状況及び今後の活動予定等について報告。国民が知らないという恐怖に駆られて闇雲に行っていくのではなく、じっくり腰を落ち着けて浸透を図ってほしいという意見があり、これを念頭に進めていくということで合意を得た。